

研究最前線



開発途上国における女性と助産師を繋ぐアプリの開発

新福 洋子 大学院医系科学研究科 保健学分野 国際保健看護学 教授

世界中で年に29.5万人の女性が妊娠・出産で亡くなっていますが、その86%がサハラ砂漠以南アフリカ地域と南アジア地域で起きています。2000年から2017年の間に、南アジア地域では妊産婦死亡率が60%減少していますが、サハラ砂漠以南アフリカ地域では40%の減少に留まっており、私が主なフィールドとしているタンザニアでは、2015年の妊産婦死亡率が出産10万対556*と、日本の100倍以上の確率で女性が亡くなっています。

亡くなる主な原因は産後出血、妊娠高血圧症候群/子癇/子癇前症、感染症です。いずれも適切な時期に医療にアクセスできれば、死を防ぐことが可能です。そのためには妊婦健診を受け、検査や合併症予防のための保健指導を受けることが重要ですが、タンザニアでは国際的に推奨されてきた4回以上の妊婦健診の受診率が51%*に留まっています。

これらの問題の解決のため、適切な時期の医療アクセスを推奨する妊娠時教育プログラムを開発し、地域で教育介入研究を実施したところ、教育を受けた妊婦は、4回以上の妊婦健診の受診率が上がり、妊婦と新生児の合併症が減少していたことがわかりました (Reproductive Health, 2019)。この効果を国全体に広げたいと考え、スマートフォンアプリに展開することとし、新しいWHOガイドラインの内容を加え、助産師用の教材を開発しました。パイロットスタディにて24名の助産師がダウンロードし、うち21名 (87.5%) が2ヶ月後も学習を継続していました。使用前後のミニクイズに参加した17名の平均得点は、6.8点から8.4点に上昇しました。また、アプリが助産師のモチベーションを向上するか、情報提供を容易にするか、週数ごとに必要な健診項目が明確になったかという問いに、回答した15人全員が「とてもそう思う」、「そう思う」と回答しました。フォーカスグループインタビューでの質的評価では、アプリにソーシャルメディア機能が備わっていることからユーザー間で交流でき、助産師たちはその交流によってアプリを使い続ける動機が生まれたと述べていました (JICHA Journal, 2021)。

2つ目に、妊婦に直接情報を届ける電子母子手帳とソーシャルメディアを組み合わせたアプリを開発しました。これによって女性と助産師がつながり、女性は病院に行くべきか迷ったときに相談したり、病院に行くほどではないマイナートラブルの対処法について情報交換をしていました。現在このアプリの効果について実装研究を行っています。

アプリは多言語に対応しているため、妊婦健診の受診率が低い他の国にも応用することが可能です。今後は、より多くの地域にこのシステムを取り入れ、女性と助産師をつなぎ、女性の適切な医療アクセスを促進していきます。

* Demographic Health Survey
Tanzania: National Bureau of
Statistics [NBS] Tanzania &
ORC Macro, 2016

